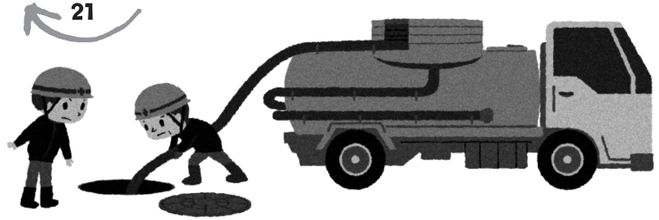
変わる日本の「暮らし」と「まち」 21

破断した排水管の復旧に挑む

千葉・浦安地区賃貸住宅群（1979年◆昭和54年から建設開始）



新田匡央
にった・まさお
illustration：Shigeyuki Sakata

そのとき、UR千葉地域支社の戸田健太朗はJR海浜幕張駅近くのオフィスにいた。24階建てビルの19階。普段は見晴らしのいい快適なオフィスが、経験したことのない揺れに襲われた。2011年3月11日、時計の針は午後2時46分を指していた。

「（震源が）近い、近いぞ！」

そんな声が飛び交うほど、激しく長い揺れだった。揺れが収まると同時にテレビをつける。震源地は遥か遠くの三陸沖だった。しかし、これはただごとではない。そう感じ取った戸田は、周囲の様子を確認しようと窓から階下を見下ろした。その目に飛び込んできたのは、すさまじい光景だった。

至るところで道路が裂け、そこから噴水のような勢いでどす黒い汚泥が噴き出している。

「液状化です。まちが沈んでしまうのではないかと感じました」

遠くでは、市原市にある液化石油ガスタンクの爆発炎上で、紅蓮の炎と黒煙が上っている。

「まるで地獄絵図でしたね」

しかし、恐怖と不安に怯んでいる場合ではない。住民は？　現場は？　安否や被害状況を確認しようにも電話が通じない。階下に降りて外に出ようとしたが、あたり一面が泥まみれで歩くこともままならない。電車は不通、車も走れるような状態ではない。身動きが取れず、八方塞がりだった。

◆土砂と汚水を吸い出せ！

週が明けた月曜日も電車は動かないという。戸田は埼玉県戸田市の自宅から幕張まで、納車されたばかりの新車で動いた。幸い、ガソリンは満タンだった。6時間かけてオフィスに着くや、先に状況を把握した職員が叫んでいる。

「浦安が大変だ！」

URが管理する賃貸住宅の建物に被害はなかったが、液状化によって地下に埋まった上下水道の配管が破断した。土砂で詰まった管もあるという。住民からは「水が出ない」「排水が流れない」という悲鳴のような電話が殺到した。

URでは道路・通路・排水は土木担当者が管轄する。だが、浦安地区を管理する千葉西住宅管理センターには土木担当者が1人しかいない。土木を専門とする戸田のもとに、住宅管理センターから助けを求める連絡が入る。戸田はすぐに浦安に車を飛ばした。現地に近づくにつれ、窓を閉めていても強烈な異臭が流れ込んできた。

「汚物の匂い……ですかね」

新浦安駅から南に進むと、道路が隆起し、陥没していた。多くの電柱も傾いている。まち全体が泥と砂にまみれ、排水が溢れ出していた。試しにマンホールの蓋を開けてみると、土砂がびっしり詰まっている。一刻も早く取り除かなければ、排水が逆流してしまう。

「ありったけのバキュームカーが必要です！　それと人も！」

戸田は訴えた。住宅管理センターが契約している業者だけでは手が足りない。本社や首都圏の支社に協力を仰ぎ、その日の夜には復旧作業の態勢を整えた。翌日、浦安には関東近郊からバキュームカーと高圧洗浄車、それにゼネコンの作業員が集結した。作業チームはマンホールの蓋を開けて回る。土砂が詰まっていればバキュームカーで吸い出し、詰まっていなくても高圧洗浄機で清掃した。排水が溢れている場所には24時間体制でバキュームカーを配置し、順次破断した配管の修理を進めた。

戸田らUR職員と作業員は、この日から泊まり込みで作業に奔走する。拠点は浦安ニューシティ美浜西エステートにあったプレハブだ。だが、宿泊に必要なものは一切ない。机や椅子を並べてベッドにし、厚手のジャンパーを布団代わりにした。戸田は「意外と役に立ったのが工事用ヘルメットでした。中のクッションが枕代わりにちょうどよくて」と笑った。

ディズニーのラッピングルーム（コランダムが販売する商品）も登場したコンフォール浦安弁天

◆液状化に対する備えはある

奮闘の結果、4、5日もするとURの敷地内にある配管の応急処置の目途が立った。だが、その先の公共下水道が通らなければまち全体のインフラは復旧しない。現に公共下水道が詰まっていることを知らず、住民が一斉に排水したため逆流し、1階の台所や風呂場から汚水が溢れた場所もある。URは、このときから浦安市との連携を密にした。戸田はバキュームカー5台分のチームの提供を申し入れ、市の指定する場所の汚泥の吸い出しを担った。

震災発生から10日ほど経過した3月22日、UR賃貸物件の入居者の生活に支障がない水準まで上下水道が復旧した。ただ、機材と作業員が不足するなかURのチームがこのまま引き揚げると、市の復旧作業に遅れが出てしまう。戸田は市役所に通い詰め、URと契約するゼネコンを市との直接契約に変更するよう調整し、作業チームがそのまま現場に残れるよう取り計らった。URの管理物件が完全復旧したのは、それから約1年後の12年3月のことである。

地震は避けられない。浦安を中心に甚大な被害をもたらした液状化も、どこで起こっても不思議ではない。今回、被害が大きかったのは地中にある上下水道の配管の破断だ。URでは、土地の隆起や陥没による配管の損傷を最小化すべく、建物の配管と外部の配管を蛇腹状の管でつなぐことにした。多少の断層による被害はこれで食い止められる。不幸にも破断した場合、復旧作業をスムーズに行えるよう敷地をブロック舗装で修復した。

「必要な場所だけ取り外せば配管に行き当たるので、作業速度が上がるからです。液状化を予測するのは難しく、完璧な対策は莫大な費用がかかるので現実的ではありません。ただ、まったく同じ被害を起こしてはならない。そのためにできることはあるはずです」

そう語る戸田の新車は、汚泥のなかを歩き回った靴で乗ったために異臭が取れなかったという。

「少し落ち着いた段階で車内清掃を依頼したんですが、それでも消えなかったですね」

あれから2年9ヶ月が経とうとしている。URは今年、寝室や子供部屋をディズニーキャラクターが描かれた壁紙で覆った「ディズニーのラッピングルーム」を浦安地区で採用している。まちには、明るい兆しも戻り始めている。

街に、ルネッサンス
UR都市機構
一日も早い復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社